

ジャワにおける伝統水田稲作の実際 (I)

——耕起から収穫・保存まで——

おお き あきら
大 木 昌

はじめに——伝統稲作研究の展望

- I 耕起
 - II 苗代
 - III 種籾の扱いと播種
 - IV 移植 (田植) (以上, 本号)
 - V 除草, 水のコントロール, 監視 (以下, 次号)
 - VI 収穫
 - VII 保存と脱穀
- 結語

はじめに

——伝統稲作研究の展望——

本稿は筆者がこれまで発表してきた、またこれから発表する予定の、中・東部ジャワの農業史、とりわけ稲作史に関する一連の論文の一環をなしている。筆者の主要な関心はジャワの村落史および村落レベルの社会経済史であるが、研究の過程で、この目的のためには少なくともジャワにおける主要な農業である稲作の歴史を理解する必要があると考えるに至った。というのは、これまでの村落史研究が主として慣習法や土地「制度」から「伝統的村落」を描く、という手法を採ってきたように思えるからである。これらの方法がジャワ村落の性格を理解するひとつの有効なアプローチであることは間違いない。しかし、いわゆる「伝統的村落」なるものがいつごろ存在したものかについての曖昧さを別にしても、かかる制度的アプローチは少なくとも以下のような問題を内包していると思われる。

制度的枠組と実態とは必ずしも一致していたとは限らず、筆者の歴史研究の経験では、両者の間にはしばしば乖離がみられる。なぜなら、制度とは本来、ある社会の望ましい規範を示しているにすぎないからである。したがって、村落史や民衆レベルでのジャワの社会経済史をより包括的に理解するためには、制度的枠組だけでなく、住民生活の実態、特に経済的側面をも知る必要があるであろう。なぜなら、たとえば村落を考えると、それは住民の制度的な枠組であると同時に生産の場でもあるからである。そこで筆者は、住民の生産活動を知るひとつの手掛かりとして、稲作をとりあげることにした。これは、ジャワの「伝統村落」に対応した生産構造とはいかなるものであったかを、「伝統稲作」を通じて考えてみたいという、筆者の問題関心に基づいている。

農業社会ジャワの歴史、とりわけ一般住民の生活史を考えると、稲作のあり方を研究することの重要性はいまさら強調するまでもない。ジャワにおいて稲作は重要な生活手段であるばかりでなく、農民社会の社会関係や生活のサイクルを規定している中核的存在であった。もっとも、19世紀以前のジャワにおいて稲作が行なわれていたことは確かであっても、それがどれほどの重要性を持っていたかは、なお検討の余地がある。19世紀以前のジャワにおいて、米は必ずしも住民の主食ではなく、イモ類、雑穀、さまざまな森林産物のほうが重要であったかもしれないのである(注1)。

しかし、少なくとも19世紀後半以降のジャワ社会についてみると、稲作、とりわけ水田稲作が住民の経済と社会生活において中枢的位置を占めていたことは疑い得ない。

ところで、筆者は他の論文で、ジャワの稲作を考える場合、20世紀初頭以前と以後とを一応分けたほうがよい、と述べた。周知のごとく、オランダ植民地当局は1870年代から各地に実験農場を設け、稲作に関する集中的な研究を始めた。こうした実験結果は以後徐々に稲作指導に適用されていたが、20世紀初頭から始まる「倫理政策」の一環として急速に普及していったと考えられる。このため、かかる新しい稲作方法が導入される以前の稲作がどのように行なわれたかは分かりにくくなったのである(注2)。もっともこれは、20世紀以降の稲作が以前の方法と全く異なるとか、これ以前に稲作方法に何の変化もなかった、ということの意味しない。しかし全体的に見て、20世紀初頭以前と以後とを分け、前者の稲作を「伝統稲作」と考えて大過ない。本稿およびこれ以降の記述において、「伝統稲作」という用語を、上記のような暫定的な意味で使用する。もっとも、ここで使われる意味での「伝統稲作」が厳密な意味で「伝統村落」に対応するとは限らないし、前者を理解できたとしても後者を理解できるとは限らない。しかし「伝統稲作」の実態を知ることは、少なくともジャワ村落の制度的枠組に内容を与えることは間違いない。さらに伝統稲作を記述しておくことにより、20世紀初頭以後今日に至るまでの稲作のどの部分がいかなる理由でどのように変化したかを比較することが可能になる。

伝統稲作を水田稲作に限ってみても、そこに含まれる問題は多岐にわたる。まず、稲作の実際を「田起し」から収穫・保存に至る一連の作業を明

らかにする必要がある。後に述べるように、ジャワの伝統稲作を部分的に記述した資料や研究は比較的多くあるが、最初から最後まで記述したものはそれほど多くない。しかし、稲作という生産活動は一連の連続した作業から成っているのであるから、稲作のすべての議論に先立って、これを明らかにしておく必要がある。この他、稲作の技術的側面(特に水文環境と灌漑技術)、稲作の農学的側面(稲の品種、水田の種類、土壌、病虫害、栽培サイクルなど)、稲作の経済学(生産と消費、労働力、労働および土地生産性、コストと収益、米の流通、上級権力による米の徴収、農民経済全体のなかの稲作、商品作物栽培と稲作、強制栽培制度と稲作)、稲作と社会・政治(村落社会と稲作、人口移動と稲作、土地制度、土地利用と稲作、政治状況と稲作)など、広範な問題を含んでいる。本稿は、取りあえず稲作の実際のうち、田起しから収穫・保存に至る一連の作業を扱うことにする(注3)。

ところで、ジャワの伝統稲作に関する利用可能な資料は現在のところ決して十分ではない。一般の農民にとって、稲作は日常のことであり、ことさら書き留める必要はない。また現地の支配層にとって、米は租税の一部として重要であったが、稲の栽培方法より、どれくらいの量を確保するのか、またはできるか、という問題の方が重要であった。このため、現地資料も、農作業暦(プラナタ・マンサ)など、一般的な作業手順に関する記録や格言(注4)などを除けば非常に少ない。しかも、19世紀末には、キタブ・ムマンサン(kitab memangsang)と呼ばれる、季節に関するさまざまな規定や規則、さらに中世ジャワで用いられていたキタブ・パラク(kitab palaku)と呼ばれるアラビアの暦などについてジャワ人はほとんど知らなかった(注5)。

一方、オランダ人をはじめ外国人による資料も大きな制約を持っている。旅行者の断片的な記述や記録は、しばしば稲作に関する特定の作業や方法について伝えてくれるが、伝統稲作の全過程を一貫して記述したものはそれほど多くない。しかし、農業はあるサイクルをもった一連の作業であり、農民の生活もそれに合わせて組み立てられるので、社会経済史の一環として稲作史を研究するためには部分的な記述ではなく全体的記述がどうしても必要である。植民地当局も現地の支配層と同様、1870年代までは稲作そのものより確保すべき米の量に関心があった。当時まで、農業に関する当局の主たる関心は、むしろ砂糖、コーヒー、茶などの輸出作物にあったといえよう。1870年代以降のジャワにおける人口の急増、「外島」におけるプランテーション労働者への食料供給の必要性に直面して、オランダ当局は猛然と稲作の実験・研究を始め、その成果は多数発表されるようになった。しかし、それらは住民の伝統稲作についてあまり詳しく伝えてくれない。筆者の伝統稲作に関する研究は、かかる制約条件の下で、若干の報告や先駆的研究をもとにしつつ、できるかぎり伝統稲作の全体を把握できるよう企図されている。以上の展望と資料状況を念頭に置いて、まず、耕起の作業から具体的に記述していこう。

(注1) 拙稿「ジャワ稲作史序説——ジャワにおける農民の移動と伝統稲作——」(『南方文化』第13輯 1986年) 37~38ページ。

(注2) 同上論文 3ページ。

(注3) 筆者はこれらのテーマのうち同上論文の他に、「19世紀の中・東部ジャワにおける焼畑耕作」(『アジア経済』第28巻第7号 1987年7月) 2~21ページ / 「植民地期ジャワにおける土地利用の変遷」(『一橋論叢』第98巻第6号 1987年6月) 123~140ページ / 「ジャワにおける森林の減少——生態環境の変化と住民生活への影響——」(『国際研究論集』〔八千代国際

大学紀要〕第1巻第1・2号合併号 1988年4月) 471~498ページ / 「ジャワにおける伝統稲作——水田の種類とイネの種類——」(『国際研究論集』第2巻第3号 1989年10月) を発表してある。本稿と同時にこれらの論文を併せて読んでいただければ幸いである。

(注4) 五十嵐忠孝「農作業、季節、星——西ジャワ・プリアンガン高地における焼畑耕作をめぐる季節性と農作業のタイミング——」(『東南アジア研究』第25巻第1号 1989年4月) 86ページ。

(注5) Holle, K. F., "Planttijd en Krachtsverspilling, een Bijdrage tot de Kennis der Padikultuur," *Tijdschrift voor het Binnenlandsch Bestuur* (以下, *T. B. B.* と略す), 第8巻, 1983年, 150ページ。

I 耕 起

耕作を開始するに当って最初にするべき作業は灌漑水路、堰、田の中や周囲の畦 (galengan) や溝の手入れである。これらの作業は、雨が降ったら直ちに水を田に溜めることができるようにするために不可欠である。灌漑施設については別の稿で述べる予定なので、ここでは耕起に先立つ準備作業だけを簡単に記述するにとどめることにする。さて、灌漑水路やそれに付随する堰ができると、水田区画 (kotak) ごとに、水路から水を田に引く取水口と排水口が造られる。この際、まず播種の日にちを決め、それから逆算してこれら作業の開始時期を決めることが理想であった。しかし、実際にはその日にちの決め方は多様であった。たとえば、来るべき雨期の雨量が少ないこと、洪水や堰の破壊による被害、以前の不作の記憶、働き手の病気や死など、さまざまな不安要因を考慮して、上記の準備作業を早めに行なうこともあった(注1)。この場合、これらの作業は通常雨期の開始時である10月ではなく、その前の8月から9月にかけて行なわれる傾向にあった(注2)。ただし、作業の開始時期は稲の種類によっても異なる

ので一概には言えない。たとえば長期種の場合は8月から始めて翌年の4、5月に収穫し、短期種および中間期種の場合は12月から1月にかけて作業を開始していたようである(注3)。

さて、以上の準備作業が終わると、田には1日か2日かけて水が引かれた。その後、1日か2日して田の草を刈り、腐らせるために水を張った田に放置する。これらの仕事が済むと、土が十分に水を含んで柔らかくなるのを待つのである。しかしこの日数は、田の土壌やその他さまざまな条件によって異なった。たとえば、比較的土が柔らかい場合、この日数は2～3日であったが、多孔質で多量の水を吸ってしまう土壌や、粘土質が優越し乾くと堅い塊になってしまう土壌の場合には、ずっと長く水を張っておいた(注4)。このような差はありながらも、水を張っておく期間はおよそ110日から2週間であった(注5)。実際の耕起開始時期は上記の準備期間および期間によって異なり、さらに灌漑水田か天水田かによっても異なるので一概には言えないが、通常は9月から10月にかけてであると考えて差し支えない。農民は稲作だけでなく農業一般に関して作業時期をさまざまな自然現象から判断した(注6)。まず灌漑水田の耕起開始時期についてみると、その基準として、虫、とりわけ羽蟻(ianou)が飛び交い交尾を始めた時、がしばしば引用される。農民の観念によれば、地中の虫は多少の雨には耐えられるが、雨期の到来を察知すると地中からはい出してくる。したがって、白蟻が飛び交うことは、いよいよ本格的な雨期が到来したことの証拠であり、それは耕起を開始する合図でもあった。これとは別に、「スバル座」(bintang wuluh, または bintang guru desa)と「オリオン座」(bintang kidung)とが日没時に地平線の反対側に同時に見えるようになった時を耕

起開始時期とする慣行もあった(注7)。19世紀末の記録によれば、こうした虫や星座による判断ではなく、一般的には、最初に雨期を告げる雨が降った時を犁耕の開始時期(embedah)としていた(注8)。

なお、ビー(H. C. H. de Bie)によれば、上記のように自然現象から耕起の開始時期を決めるのは主として孤立した地域で、これらの星座は信仰の対象でもあった。これに対して人口が集中しコミュニケーション・センターに近い場所では、灌漑施設から水を得られるようになると直ちに耕起を開始することが多かったようである(注9)。ここで、人口が集中しコミュニケーション・センターであることが、灌漑施設から水を得られるようになった時を耕起の開始時期とすることとどのように関係するのかは明らかではない。おそらく、人口が集中しているところでは、集約的な灌漑施設が発達し、そこでは耕起の開始時期を決めるのに伝統的な自然現象に依存していなかった、という意味であろう。ビーの記述は西ジャワに関わることが多いが、灌漑施設が発達したジャワの他の地域でも同様のことが言えるのではないだろうか。

地域的な差について補足すれば、上記のような雨期を予告する自然現象が現われ、実際に雨が降っても農民は直ちに耕起を開始するとは限らなかった。たとえば中部ジャワのパニユマス(Banyumas)州パトゥール(Batur)郡では、雨が降り田に水が張られて土が十分柔らかくなくても、近くの泉が枯れていたり、そこに十分な水がない場合には耕起を開始しなかった。これは、この地方の灌漑用水が雨そのものよりも泉の湧水に依存していたからであろう。中・東部ジャワでは湧水を利用した灌漑はかなり広範に存在したので、それらの水田でも同様の状況が見られたかもしれない。また、雨期の到来がはっきりしても、具体的にいつ

耕起を始めるかを、その村の農民の間で、さらには隣接する村の住民と話し合っただけで決めることもあった(注10)。

天水田の場合、耕起の開始時期は雨期の雨が実際に降る直前であった。しかも、田に雨水が溜り、土が柔らかくなる前に耕起を済ませておくことが理想的であった。というのは、天水田の場合、いったん降った雨水を十分活用するためには、まず土を掘り返しておき、水をできるだけ多く吸収できるようにしておかなければならなかったからである(注11)。以上見たように、耕起の開始時期ひとつを見ても、地域、地理的条件、田の状態、慣行によって必ずしも一様ではなかった。ここでは資料的な制約のため明らかにできないが、年間を通して水に不自由しないで耕作可能な湿地水田や、乾季だけ耕作が可能となる湿地水田の場合、ここで述べた天水田や灌漑水田とは耕起の時期が異なったことは当然である。

耕起には犁を使う場合と鋤を使う場合とがあり、どちらを使うかはさまざまな条件によって決められた。役畜(水牛または牛)およびそれに要する農具があり(自分自身で所有するか、誰か他人から借りてくるかして)、耕起すべき田の広さが十分にあれば犁耕(中・東部ジャワでは meluku。西部ジャワでは ngawalajar)し、役畜を持たないか借りの余裕がない、田の区画が非常に小さく犁が使えない、土壌が厚い泥で覆われ役畜が使えない、などの場合には鋤を用いた。もっとも、犁で耕起するといっても、全てを犁で作業するわけではなく、溝の部分や、田の隅などに鋤を使うことは言うまでもない(注12)。

犁を使う場合、実際の作業に取りかかる前に簡単な儀礼を行なうこともあった。たとえば19世紀中葉のブスキ(Busuki)州バトゥアン(Batuan)地

方の状況を記録したと思われる記述によれば、この儀礼はシデカー・ブミ(sidekah bumi)と呼ばれた。この場合、家族全員が田に一定の間隔で立ち、祈りの言葉を唱えたあと、香または稲藁が焚かれた。農民はこの煙がまっすぐに昇るのか、どちらかの方向へたなびくのかによって、その年の米の作柄を占ったという(注13)。また、スラカルタ地方ではバレスィー・デサ(baresih desa)とよばれ、回教暦第8の月(Saban)に、村の守護神または創始者を祀って供食を催し、豊作を祈願した(注14)。耕起は犁(luku)または鋤(pacol)で行なった。前者の場合には、まず耕起に参加する人々は手に犁を持ち、左足をまっすぐに延ばして呪文(これはしばしばイスラム教の言葉。コーランの一節?)を3回唱えた。そして、水牛の足を(布で)柔らかく巻いた後、豊穰をもたらす労働を思い起こさせるために、「おお水牛よ、よく覚えておいてほしい。人はお前を殺すことも食べてしまうこともできるのだ、ということ。だから、お前は4本の足を人々のために役立てなければならない」と語りかけた(注15)。こうした「伝統的」儀礼が、他の稲作儀礼と同様、ジャワのどの地方でいつごろまで行なわれ、どの程度一般的であったかは分からないが、少なくとも19世紀末まで一部地方で行なわれていたことは確かである。

耕起は、耕すべき田の状況その他の事情によって1回ないし2回行なわれ、まれに3回行なわれることもあった。犁を使う場合、犁はその動きが直ちに役畜の首に伝わるよう役畜の首に繋がれた。そして、ラタン(籐)や竹の皮でできた紐を直接役畜の「くびき」に結びつける。この紐をゆるめて長くすると犁は下に降り、犁の刃は土を深く掘り返す。またこれを引いて短くすると犁は上に持ち上げられるようになっている(注16)。耕起の

際、最初に張っておいた田の水をいったん落とした。犁耕は、まず田の畦に沿って外側から螺旋状に行なわれ、最後に真ん中に到達する。最初の犁耕は、大雑把に土を掘り返して大きな塊にするところまでである。鋤で耕起を行なう（中・東部ジャワでは *nyeket*。西部ジャワでは *ngabaladah*）場合も同様である。いずれの場合にもできるだけ深く耕すことが理想であるが、実際にはそれほど深くなく、せいぜい2分の1¹（15%）ほどであった（注17）。また土壌によっては、深く耕すことを意図的に避けることもある。これは、下の方に質の悪い土の層がある場合で、深く耕すことによって質の悪い土を表面に出してしまい、質の良い土と混ぜ合わせることによって、かえって土壌全体を悪化させることを農民が恐れていたからである（注18）。耕起が何回も行なわれる場合、「最初の耕起」（*ngajemmake*）が済むと畦の補修が鋤で行なわれた。これは、主として耕起の際に傷ついた畦を補修するためである。ここまでの作業が約1週間である。こうして第1回目の耕起が済むと、土が太陽の熱で堅くならない程度に再び田に水が張られ、1週間から10日間、長い場合には20日間ほど放置された（*embedah*）（注19）。これは土をさらに柔らかくすると同時に、耕起の際に掘り返された土と混ぜ合わされた植物等の有機物を腐らせるためである（注20）。湿地水田の場合、犁をかけたあと、長さ6¹（1 *voet*=0.3¹。6 *voeten*=1.8¹）ほどの丸太（*garu giling*）、竹、または歯のない「まぐわ」で表面を平にならした（注21）。

地方によっては役畜を追いながら「おお、農業の守護者よ、私を助けてください。病気や疫病を追い払い、虫や鼠を追い出してください」と唱えた。また、耕す方向を年によって決める場合もあった。犁耕の日についても、月、木、金曜日は

犁にトラブルが起きやすいのでできるだけ避けたほうがよいとされた。もし、1回目の耕起の最中に水牛や牛が糞をした場合、その年の稲は根腐れ病（*amalodoh*）に冒されると信じられていた（注22）。こうした信仰には豊穰を願う農民の期待と不安が如実に現われている。「2回目の耕起」（中・東部ジャワでは *nronjoili*, *ngluwed*。西部ジャワでは *malikan*）は、最初の犁き跡を横切るように行なう（*enrenjel*）（注23）。2回目の耕起では、大きな土の塊を細かく砕くよう丁寧に行なわれる。犁耕の後には、1回目と同様畦の補修を行なう。ここで畦の高さを平にするよう、高すぎる箇所を切り、低い箇所に土を盛る（*mopok*）こともあるが（注24）、次に述べるように、まぐわをかけた後に畦の仕上げをすることもある。これらの作業が済むと再び水を田に張り、数日間放置する。この際、水の上に出ている雑草は引き抜かれ、水の下にあるものは「まぐわ」をかけるときに土に鋤き込まれる（注25）。2回目の犁耕の後、田には「まぐわ」がかけられる（中・東部ジャワでは *ngluweg*, *anggaru*。西部ジャワでは *ngagaru*）。ジャワの標準的なまぐわは、長さ1ドイツ¹（*German roed*, 3.77¹）、4¹（*duim*, 約10¹）のつめが4分の1¹（*voet*, 7.5¹）間隔で並んでいるものであった（注26）。まぐわは、犁の場合とは異なり、あらゆる方向にまんべんなくかけられる。そして、残った土の塊は鋤で細かく砕いた（注27）。この際、土が均等に水分を吸い、柔らかくなるよう注意する（注28）。準備の仕上げとして、畦の草をとり、畦を再度補強すると同時にその高さを一定にし、虫の巣穴をつぶすように泥で塗り込める（中・東部ジャワでは *lepa*, *mopok*）。畦の高さを一定にするの背景には、稲の守護者であるデウィ・スリ（*Dewi Sri*）が畦を歩きやすいように、という信仰があったようである。し

かも興味深いことに、畦の仕上げに際してハジ(haji)やサントウリ(santri)などのイスラム関係者が立ち会って、鼠その他の病虫害から水田を守ってくれるよう、デウィ・スリに祈りを捧げることもあった(注29)。稲作儀礼にイスラム教が介在することは通常あまりないが、これはたんに宗教的意味合いを強めるためにたまたまイスラム関係者が登場したのか、あるいは稲作の進展過程でイスラム的要素が介入した歴史的経過があったのかは分からない。もし、犁と「まぐわ」による耕耘を2回ずつしたとすると、作業開始からの総日数は平均して50日から60日くらいであった(注30)。

(注1) Bie, H. C. H. de, *De Rijstkultuur op Java: Kort Beschrijving der Rijstkultuur van de Inlandsche Bevolking op Java*, Mededeelingen uitgaande van het Department van Landbouw, No. 16, バタビア, C. Kolf, 1911年, 12~13ページ。

(注2) Hoek, P. van, "Handeling voor de Padikultuur," *Tijdschrift voor het Nederlandsch Indië*, 第2巻, 1976年, 248ページ。

(注3) 宇野圓空『マライシアにおける稲作儀礼』東京 東洋文庫論叢第28 1936年 105ページ。

(注4) Bie, 前掲書, 13~14ページ。

(注5) Bie, H. C. H. de, *De Landbouw der Inlandsche Bevolking of Java*, Eerst Deel, Mededeelingen uit 'Slands Plantentuin XLV, バタビア, C. Kolf, 1901年, 35ページ/Hoek, 前掲論文, 342ページ。

(注6) 五十嵐 前掲論文。

(注7) Parvé, Stein, "Bijdrage tot de Kennis van de Rijstkultuur op het Eiland Java," *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde van het Bataviaasch Genootschap van Kusten en Wetenschappen* (以下, *B. K. I.* と略す), 第5巻, 1856年, 401ページ/Bie, *De Landbouw*....., 25ページ/Veth, P. J., *Java: Geographisch, Ethnologisch, Historisch*, 第4巻, ハールレム, Erven F. Bohn, 1907年, 477ページ。

(注8) Broek, van den, "De Verbetering van

Padikultuur op Java," *Tijdschrift voor het de Binnenlandsch Bestuur*, 第15巻, 1897年, 5ページ。

(注9) Bie, *De Landbouw*....., 25~26ページ。

(注10) Parvé, 前掲論文, 401ページ。

(注11) Henny, G. T. H., "Beschrijving van Rijstkultuur [op Java]," *B. K. I.*, 第8巻, 1862年, 44ページ。

(注12) Bie, *De Rijstkultuur*....., 14ページ。本稿は中・東部ジャワを主たる対象としているので、現地語表記についても、特にことわらない限り中・東部ジャワのそれを示す。ただし、参考のために本注の引用箇所に見られるように西ジャワ(スンダ)地方の表記も併記する場合がある。

(注13) Parvé, 前掲論文, 401ページ。

(注14) Veth, 前掲書, 第1巻, 1875年, 321ページ/宇野 前掲書 168ページ。

(注15) Gelpke, Sollewijn J. H. F., "De Rijstkultuur op Java," *B. K. I.*, 第21巻, 1874年, 148ページ。

(注16) 同上論文 147ページ。

(注17) Broek, 前掲論文, 4~5ページ。

(注18) Hoek, 前掲論文, 341~342ページ。

(注19) Broek, 前掲論文, 5ページ。

(注20) Henny, 前掲論文, 44ページ/Gelpke, 前掲論文, 148ページ/Bie, *De Landbouw*....., 37ページ/同, *De Rijstkultuur*....., 15ページ。

(注21) Gelpke, 前掲論文, 148ページ。

(注22) 同上論文。

(注23) Bie, *De Landbouw*....., 37ページ/Broek, 前掲論文, 5ページ。

(注24) Bie, *De Landbouw*....., 37ページ。

(注25) Broek, 前掲論文, 5ページ。

(注26) Gelpke, 前掲論文, 148ページ。

(注27) Bie, *De Rijstkultuur*....., 15ページ/Broek, 前掲論文, 4~5ページ。

(注28) Henny, 前掲論文, 44ページ。

(注29) Gelpke, 前掲論文, 148~149ページ。

(注30) Hoek, 前掲論文, 342ページ。

II 苗代

田の耕起と水路の手入れが完了すると苗代

(pawinihan) を造る。苗代を別途に設ける利点は、最初から本田に種を播く場合より雑草対策が容易で、苗代を設ける手数はかかっても結局は稲の発育にもよいからである。さらに、フェト (P. J. Veth) によれば、苗代から均等な大きさの苗を取り出すことができるのもこれを設けるもう1つの利点である。さもないと、苗の成長度合いはまちまちなり、結果的により長期間田に水を張っておくことが必要となる(注1)。ところで、全ての水稻耕作において苗代が設けられたわけではない。沼沢地 (rawa) や水が十分に得られない地方において水稻栽培をする場合、直接種籾を播き、稲が成長する段階で何回か間引をする方法があった。たとえばプレアンゲル (Preanger) 州東南部では、播種のまえに種籾を2日間水に浸しておき、3、4粒ずつ播いた。この際種籾の上から土をかけない。最初の1カ月は、朝に水を引き入れ、夕方にできるかぎり田から水を落とす。そして苗が「分けつ」を始める頃になると、次第に水の量を減らしていった。中部ジャワのクドゥス (Kudus) 地方の場合も、最初のうちは十分に水を与え、播種後1カ月ほどたつところから間引を始めた。苗代を用いないで水田に直接種籾を播く直播き方法は地域により、サウル (sawur)、タンドゥール・アチュレット (tandur acret)、スパール・トゥフル (sebar tuhur)、タンドゥール・クンチュロンガン (tandur kunclongan) などの名称で呼ばれていた。こうした方法は、上記地域の他に、スラバヤ州グリセ (Grise)、シダユ (Sidayu) 地方、ペカロンガン (Pekalongan)、クラワン (Krawan)、湿地の排水灌漑がなされる以前のクディリ州ワルジャジェン (Warujajeng) 地方など、いずれも沼沢地または湿地で採用されていた。これについてビーは、湿地の排水設備が整い、土地の改良をする以前、こ

の方法はジャワの湿地ではかなり一般的であったであろう、と述べている(注2)。筆者もビーの見解に賛成である。

さらに、古い時代にジャワ農民がかかる湿地を利用して水稻栽培を行っていた可能性もあり、その場合、苗代を用いない水稻栽培はむしろ通常の形態であったと思われる。『蘭領インド百科事典』(注3)によれば、1915年のジャワ (私領地を除く) およびマドゥラ (Madura) の水田総面積のうち約20%が湿地水田であったから、このタイプの水田は過去にはもっと比重が大きかったと考えられる。いずれにせよ、湿地水田での直播は、焼畑のそれに対応して、ジャワの基本的な播種方法の一角をなしていたことは間違いない。以上のように考えると、苗代を用いない水稻栽培が、焼畑と同様、はたして特殊な形態と言いきれるか否か微妙である。これは、ジャワにおける稲作の起源および変遷と関連した重要な問題を含んでいるので、その詳細な検討は今後の課題としたい。

さて、苗代には水を張る水苗代の他に、浮苗代、乾地苗代を合わせて3種があった。まず、最も代表的な、水苗代の整備から見てみよう。

1. 水苗代 (pawimihan lerepan)

苗代に水を張るには灌漑による方法と天水による方法とがあったが、ここでは灌漑による方法を例に記述する。苗代を作る場所は最初の耕起の過程で決められたが、苗代用地を同時に犁耕する場合と、後で別個に犁耕する場合とがあった(注4)。いずれの場合でも、苗代は通常、取水と排水に便利な場所に設けられた。しかし、苗代は必ずしも土が最も肥えている場所に作られるとは限らない。むしろ、あまりにも恵まれた条件の下で育った苗は、より恵まれない条件で育った苗より移植後に弱くなってしまふ、と農民は考えていたよう

である。ジャワにおいては、苗代への施肥は通常は行なわれなかった^(注5)。西スマトラの高地地方では苗代に木を燃やした灰を撒くが、これは肥料としての役割と同時に、病虫害を防ぐ役割をもっていた。なお、苗代は日当たりがよくなければならないので、近くに木があったりその他の事情で日陰になる場所は避けられた^(注6)。

苗代への施肥について補足しておく、ジャワでも、土が極端に貧しい場合には少量の米糠を苗代に撒くことはあった。さらに、新たに開墾した水田や、地味の痩せた水田の場合には、苗代用地を近隣の農民から借りることもあった。この際、借り手は借りた土地と同じかそれ以上の面積の水田を貸し手に与えなければならなかった。こうして交換される面積は、苗代用地を貸そうとする人との交渉によって決められた。かかる貸借が不可能な場合には苗代を作らず、他人の苗代に育った苗を買うことになる。しかし、農民は一般に苗を売ろうとはしないので、実際には十分な苗の余剰があった時のみ若干の苗が売買されたにすぎなかったようである。肥料とは直接関係ないが、土の中の酸を中和するために、柑橘類 (citron)、しょうぶ、エロ (elo) と呼ばれる木の葉を苗代に置くこともあった^(注7)。苗代を耕す前に花と、ボレ (boreh) と呼ばれる一種の香料 (粉と液体とを混ぜあわせたもの)、それに鶏を主品とする儀礼用の料理 (tumpeng) を、苗代の四隅に置く儀礼 (恐らくは農民による儀礼的な供食——スラメタン [selamatan]) を行なう場合もあった^(注8)。しかし、これもどの程度一般的であったかは分からない。中・東部ジャワにおける苗代の整備は、まず1回ないし2回の入念な犁耕によって行なわれた。ただし、最初に本田を耕起する際に苗代も同時に犁耕する場合、この犁耕は省略されることもあった。いずれ

の場合にも、犁耕と同時に除草も行なわれた。次に周囲と中に溝が掘られ、畦が造られた。これらの作業が済むと表面を平にするために、まぐわが1回ないし2回かけられた。これが終わると畦の強度を試すために溝に水を流した^(注9)。まぐわをかけたあと竹やバナナの幹を苗代に転がし、表面をさらに平らにならすこともあった^(注10)。というのも、苗代に凸凹があると、そこに播かれた籾は水のなかで腐ってしまうからである^(注11)。苗代の大きさは本田の面積によって異なったが、平均して本田の10%ほどであった^(注12)。そして、平均的な1区画は長さ1^{roed} (1 roed=約3.8^{roed}) ないしはそれ以上、幅4^{roed} (1.2^{roed}) ほどで、苗床と苗床との間に、1.5ないし2^{roed}の幅の溝を掘った。この溝は、作業をする際に人が歩くためのものであるから、底の堅い土に届くまで掘られた。苗代の整備に関して最後の作業は、割いた竹の棒の両端を苗代の周囲に刺して垣根を造ることである^(注13)。こうして苗代の準備が整うと、いよいよ播種である。つぎに、浮苗代について簡単に触れておこう。

2. 浮苗代

深い沼となっている湿地では、浮遊する苗代が用いられた。これには、筏の上に苗代を設ける方法と、カンクン (kankung: *Ipomua reptans* Poir)、ガンゲン (ganggeng: *Hydrilla verticillata* Poir)、その他の水草を厚く湿地に敷いた上に粘土質の泥で覆う方法とがあった。種はこの草の上に播かれ、さらに藁で覆われた。こうした苗代はあまり一般的ではないが、ソロ川下流の、いわゆるブンガワンジェロ (Bengawanjero) 地域のグリセ (Grisse) やラモンガン (Lamongan) 地方で、少なくとも20世紀初頭までは行なわれていた^(注14)。しかし、すでに述べたように、ジャワにおいても湿地水田は

かなり重要性を持っていたから、このタイプの苗代もかつては広範に見られたものと思われる。

3. 乾地苗代

乾地苗代（中・東部ジャワでは pawinihan kletegan, pawinihan kletekan, pawinihan krakalan, pawinihan awu awu。西部ジャワでは pawinihan racikan）は、20世紀初頭までのジャワにおいて、一般に考えられているより広範に見られ、かつ古くから行なわれてきたようである^(注15)。20世紀初頭に乾地苗代の調査を行なったあるオランダ人によれば、この方法には大きく分けて2種類あった。1つは、乾地苗代ではあるが水を用いる方法である。まず、田に野菜を栽培するときのように畝を造り、土を盛った部分に種を深く埋め込み、へこんだ部分に水を引いた。ただしこれは流水灌漑のように水を流すのではなく、土に水分を与えるために引くのである。もし水が得られない場合には井戸を掘って水を確保した。他の1つは、8月頃、陸稲 (padi gogo) と同様に、乾地本田に直接種を播く方法である。これらの準備が終わると雨期の降雨を待つことになる。かかる方法は一見焼畑や通常の陸稲栽培の方法と変わらないように見えるが、ここで育った苗が後に移植される点で後者とは異なる。そして、どちらの場合でも種は地中深く埋められた^(注16)。

乾地苗代は北部および南部バンテン (Banten)、クラワン (Krawan)、プレアングル南東部、チルボン (Cirebon)、プカロンガン (Pekalongan)、スラバヤ (Surabaya) の、天水田地域で行なわれていた。本田が住居からあまり離れていない場合には、屋敷地内に乾地苗代を設けた。また、本田の周囲にこれを設けることもあった。中部ジャワのグロボガン (Grobogan) では、洪水による苗の流出や間引で減少する分を考慮して、十分な苗を確

保するために水苗代と同時に乾地苗代を設けることがあった^(注17)。ただし、両者を同時に行なうことには、十分な苗の確保とは別の目的があった可能性もあるので、これについては後にもう一度触れようと思う。

乾地苗代を造る作業は水苗代のそれより困難が多かった。というのも、雨期が到来する前の、まだ土が固い時期に繰り返し耕しておかなければならないからである。ただし、あまりに土を柔らかくしすぎると、雨期の豪雨の際に、種を覆っている土が流され、新たに薄くて、恐らく固い土の層が形成されることになる。乾地苗代に播かれた種および苗の成長は、最初のうち水苗代の場合に比べてずっと遅い。葉はあたかも病気にかかったように淡い緑か黄色がかっており、苗は全体に弱々しい。しかし移植後は乾地苗代の苗は水苗代の苗よりずっと早く成長する^(注18)。

ところで乾地苗代は、雨期が遅れたり、降雨が少ない可能性などの不安定性に加え、労力の点でも水苗代より不利にみえるのに、なぜ実際に採用されたのだろうか。これを考えるとき、乾地苗代が主として天水田地域で実施されていた、という事実は注目に値する。もし天水田が陸稲（焼畑を含む）から灌漑水田への移行過程で現われた栽培方法であったとしたら、乾地苗代もこれに対応した苗代形態であったと考えられる。本稿の冒頭で述べたように、苗代から本田へ移植することにより、一定の成育段階に達した苗を揃えることができるし、本田での除草を容易にし、したがって雑草の害を少なくすることができる。また、水苗代の場合、あまり条件のよいところで育った苗は後に弱くなる、と農民が考えていたことは、灌漑施設が整備されていないから乾地苗代を採用しただけでなく、この方法にも強い苗を作るという利点

を農民が認めていたことを示唆している。水苗代が可能な場合でも、これと同時に乾地苗代を設けていた事実は、かかる農民の態度を如実に物語っている。次に、種籾の扱いと播種についてみよう。

(注1) Veth, 前掲書, 第4巻, 497ページ。

(注2) Bie, *De Rijstkultuur*....., 21~22ページ。

(注3) *Encyclopaedie van Nederlandsch Indië*, Tweede Drukk, 第3巻, ハーグ, Martinus Nijhoff, 1919年, 654ページ。

(注4) Bie, *De Rijstkultuur*....., 16~17ページ。

(注5) 同上書 17ページ/Bie, *De Landbouw*....., 38~39ページ。

(注6) Parvé, 前掲論文, 403ページ。

(注7) Gelpke, 前掲論文, 140~141ページ。

(注8) 同上。

(注9) 同上論文 140~143ページ。

(注10) Bie, *De Landbouw*....., 39ページ。

(注11) Broek, 前掲論文, 10~11ページ。

(注12) Veer, K. van der, "Rijst," C.J.J. van Hall; C. van de Koppel 編, *De Landbouw in de Indischen Archipel*, 第IIA巻, ハーグ, Van Hoeve, 1948年, 65~66ページ。

(注13) Bie, *De Landbouw*....., 38ページ。

(注14) 同上書 40ページ/Bie, *De Rijstkultuur*....., 19ページ/Veer, 前掲論文, 67ページ。

(注15) Bie, *De Rijstkultuur*....., 19ページ。

(注16) R., H. van, "Over Droge Padikultuur en Droge Kweekbedden," *T.B.B.*, 第25巻, 1903年, 373~376ページ。

(注17) Bie, *De Rijstkultuur*....., 19~20ページ。

(注18) 同上書 21ページ。

III 種籾の扱いと播種

種籾の扱いは播種の仕方によって異なる。播種の方法は大別して、稲穂をそのまま苗代に置くウリタン(中・東部ジャワでは *uritan*。西部ジャワ *ranggeuyan*, *tebarang*)と、穂から籾(*gabah*)を外し

て播くスバラン(*sebaran*)の2つがあった。1850年代末の資料によれば、ウリタンとは籾を穂に付いたまま播く苗代で、スバランとは籾を穂から分離して播種する苗代を指していたようである(注1)。

しかし、これ以降の資料には両者をもつばら播種の方法として記述しているので、本稿においてもこれに従うことにする。このうち、全体としてみればスバランの方が一般的であったが、ウリタンもジャワの稲作において重要な播種方法であった。ウリタンの場合、種籾を選別することなく、穂を水苗代にさし込むだけでよい。この方法を採用する農民は、ウリタンの方がスバランの際に必要な種籾の選別その他の作業(後述)を省くことができる、山地の水田では豪雨によって種籾が流されにくい、スバランに比べて発芽後に根が深く伸びないので移植が容易である、などの利点があると考えていた(注2)。

スバランとは元来、穂から籾をとりはずし、それを散播、すなわち「ばらまく」ように播種する方法である。これはウリタンに比べて煩雑な作業を必要とした。まず、種籾用の稲穂から籾を手で取り外すか、または素足で稲穂を踏んで分離する。こうして取り出された籾を盆でふるい、不純物を取り除く。次に、選別された籾を箒(*kranjang*)に入れ、できるだけ緩やかな流れのなかに、まる1日(24時間)浸しておく。この際、水に浮いた籾は未成熟な籾や死んでしまった籾なので取り除かれる。翌日この箒を取り出して、籾を2日2晩、太陽の直射を避けて日陰で乾かす。ただし夕方に、籾の新鮮さを取り戻すために若干の水を与える。通常は箒を水から取り出して3日くらいたって、籾が開いたことを確認すると直ちに苗代に種籾を播いた(注3)。この時点では苗代には水が張ってあるが、播種の当日には、種籾を土に馴染ませ

るために水を落とした(注4)。これは播種の際に、もし水が多すぎると播いた種籾は水の上に浮いてしまい、発芽後に根が付きにくいからである。しかし実際には、水が多くて種籾が浮き、風によって苗代の一方に集まってしまうこともしばしばであった。播種は、一握りの種籾を手を持ち、できるだけ1カ所に集まらないように体を揺すりながら播く方法(nyabar)と、手に握った籾を、腕を振りつつ指の間からこぼすように播く方法(nyawur)とがあった。いずれの場合も、籾を泥土の中に押し込むことは避けられた(注5)。

播種に用いる種籾の量は必ずしも一定ではないが、1860年代および70年代の記録によれば、平均して1バウ(1 bau=0.7畧)当り80から100カチ(1 kati=620畧)、したがって、1畧当り71畧から89畧であった(注6)。この際、籾の計り方は地域や当該農民によって大いに異なった。計量の単位はポション(pocong)と呼ばれ、これは稲の穂を親指と人差し指とでつかめる一束を指す。しかし時には両手の親指と人差し指とでやっとなつかめるほど大きな束を作ることもあったという(注7)。なお、19世紀末のオランダ人による記録には、「1平方畧に対して1カチ以上播いてはいけない」という記述があり、これは1バウ当り50カチを意味した(注8)。さらに、20世紀初頭には播種量は1バウ当り平均50カチ(1畧当り約44畧)(注9)、植林地期の終わりころには、平均して1畧当り籾米50畧から60畧、1平方畧当り60カチほどであった(注10)。こうした数値はサンプルをとった地域や水田によって異なるので、これらをそのまま一般化することはできない。しかし、全体的傾向として単位面積当りの播種量が、19世紀最後の四半世紀以降急速に減少し始めたことは容易に想像できる。たとえば1870年代に、あるオランダ人官吏は、ジャワ農民は種籾を厚播きしすぎ、

これは何も良いことはない、と述べている(注11)。おそらく当時の植林地当局は、かかる実態を把握したうえで種籾を薄く直線的に播くよう指導していったのであろう。そして、植林地期の終わりには、一部ではあるが、種籾を直線的に播く方法が農民によって採用されていた(注12)。単位面積当りの播種量が減少した背景には、植林地当局による指導のほか、播種量を減らそうとする農民側の対応もあったと考えられる。なお、苗代造りから播種を含む作業の実労働の延べ日数はおよそ12人/日ほどであった(注13)。

播種が終わると、水の制御を除いて移植まであまり作業はない。播種後6日ほどで若芽が出揃ったころ、いったん水を落とした苗代に再び水を張る。ただしこの場合、成長しつつある若芽が水の下にならないよう注意しなければならない。なお、播種から移植までの日数は田の場所と稲の品種によって異なった。1860年代初頭、ヘニー(G. T. H. Henny)によって記録された資料によれば、晩成種(長期種:padi dalem)を低地で栽培した場合60日、同山地の場合90日、早稲(短期種:padi genjah)を平地で栽培した場合30日、同山地では50日、平均して50~60日ほどであった(注14)。これより15年ほど後に書かれた資料によれば、晩成種を平地で栽培した場合50~60日、同山地の場合70~80日、早稲を平地で栽培した場合36~40日、同山地の場合45~50日ほどであった(注15)。しかし、19世紀末から20世紀初頭の状況を示していると思われるビーの記述によれば、平地の暖かな場所の場合25日から40日ほどであり、気温の低い山地の場合40日から50日であった(注16)。これらの日数は平均にすぎないので厳密に考える必要はないが、一応の目安として示しておく。ここで、1860年代と20世紀初頭前後とを比べると、後者の

ほうが播種から移植までの日数が短くなっている。この差がはたして栽培方法の変化や稲の品種改良によって生じたものなのか、サンプルをとった場所による、たんなる地域差なのか、さらに栽培期間を短縮しようとする農民の社会経済状況における変化のためなのかは分からない。ただし、ビーの記述は主として西ジャワを対象としているように思われる。いずれにせよ、播種から移植までの期間の短縮化傾向およびその詳しい原因については将来の課題としたい。

(注1) Parvé, 前掲論文, 403ページ。

(注2) Bie, *De Landbouw.....*, 40 ページ/同, *De Rijstkultuur.....*, 24~26ページ。

(注3) Hoek, 前掲論文, 341ページ。

(注4) Gelpke, 前掲論文, 141~142ページ。

(注5) Broek, 前掲論文, 11~12ページ。

(注6) Henny, 前掲論文, 45 ページ/Gelpke, 前掲論文, 141~142ページ。

(注7) Gelpke, 前掲論文, 141~142ページ。

(注8) Broek, 前掲論文, 12ページ。

(注9) Bie, *De Rijstkultuur.....*, 25ページ。

(注10) Veer, 前掲論文, 66ページ。

(注11) Gelpke, 前掲論文, 142ページ。

(注12) Veer, 前掲論文, 66ページ。

(注13) Gelpke, 前掲論文, 143ページ。

(注14) Henny, 前掲論文, 45ページ。

(注15) Hoek, 前掲論文, 341ページ。

(注16) Bie, *De Landbouw.....*, 41ページ。

IV 移 植 (田植)

苗代の苗に若い葉がボビン状に巻きつくようになると、なすべき作業は、水のコントロールを除けばそれほど多くない(注1)。多くの場合、播種の段階で種籾はすでに発芽している。播種後6日ほどで若い葉が出揃うと、苗床には最初のうち昼の間だけ水を張り、夜には再び水を落とした。水を張る際、葉が完全に水を被った状態にならないよ

う注意しなければならない。夜に水を落とす理由にははっきりしないが、この方が苗の成長が早いと考えられていたようである。こうした水のコントロールを8日ほど行なった後、苗を強くするために田から水を落としたままの状態にしておく(注2)。そして、苗が20~30センチになり、茎に節ができるようになると、農民は、苗を移植する時がきたことを知る(注3)。移植の2日ほど前に、根の成長を活発にするため、苗代には再び水が張られた。とりわけ、雨が長期間降らなかったりその他の理由で苗代に十分な水が得られず土が固くなってしまった場合、移植の際に根を傷めるので、十分な水を与えて土を柔らかくしておかなければならなかった(注4)。さらに、移植の数日前には畦の表面を削り、側面を泥で塗り固め、いよいよ田植の準備完了である(注5)。

移植の作業は男女間ではっきりと分けられていた。すなわち、苗代から苗を抜き本田へ運ぶまでが男の仕事で、田植そのものは女性の仕事であった。苗代から苗を抜く作業は地域によってさまざまな名称で呼ばれた(中・東部ジャワでは *daut*, *andaut*, *ngarit*, *cabut*。西部ジャワでは *ngababut*)。この作業はまず右手で適当な数の苗を握り、拳を回転させながらまっすぐ上方に引き抜く。この時かなりの茎が傷んでしまう。抜き取られた苗は左手で受け取り脇へ置かれる。そして両手で適量の苗を一束にする。次に苗の束を水に浸し、根に着いた泥を落とした。これは、泥で絡みついた根をほぐすためであった(注6)。しかし注意深い農民は、抜き取った苗の束から1本1本でいねいに分離し、根についた泥を洗って取った。この時、苗の先端部が切り取られることがあった。これは次のような事情による。苗代へ種を厚播きした場合苗は密生し、苗の1本1本が弱々しくなってしまう

う。かかる苗をそのまま本田に移植すると苗の先端が垂れ下がり、土に着いてしまうので、それを避けるために苗の先端を短く切っておくのである。このような場合、苗代から苗を抜く作業はダウトゥではなく、「切断を助ける」という意味のニャンパット・アリット（中・東部ジャワでは *nyambat arit*。西部ジャワでは *ngabiri*）という、苗の先端を切る行為に重点が置かれた語で表現された。しかし、かかる方法は中・東部ジャワよりも西部ジャワで広範に見られたようである^(註7)。この方法を採用する農民は、予期しない天候の異変その他による被害を想定して余分に苗を育て、たとえ被害にあっても最低限必要な量の苗を確保しようとしたものと考えられる。

抜き取られた苗は、西部ジャワでは予め水に浸して柔らかくしてある稲藁で、中・東部ジャワではバナナの皮や薄い竹の皮で作った紐 (*tali agel, tali gedlog*) で束ねられた (*mbenteli*)^(註8)。こうして作られた苗の束を本田に運ぶために、紐の下の部分に棒を差し込んだ。この時および、本田に運んだ苗の束から棒を引き抜く時に苗を傷めてしまう^(註9)。実際の移植に先立って、伝統的には古老とドクン (*dukun*。呪術師または民間療法家) が呼ばれた。ドクンは当日の曜日と「市」の日 (*wage*) に付された数と合算し、その数だけのルンプ (*lumbu*。地下茎を食用とする植物) の葉と、グラガ (*glagah*。水辺に生育するキビ科の植物) の葉とを本田の一部に植えた。これらの植物は、活発な「分けつ」の象徴であった。パカロンガン地方では、水田所有者の妻が新しい衣服に身を包み、花で飾られた帽子をかぶって最初に苗を植え、続いて妻方の親族や知人が一斉に田植をした^(註10)。かかる慣習がどれほど一般的であったかは分からない。通常の役割分担によれば、男が苗を苗代から運

び、水田の大きさに従って苗の束を分けて次々に水田へ投げ入れた (*emban jari*)。女たちは苗を水田に植えていくが、この際、田植をする女たちは本田のあちこちに分散するのではなく1つのグループとなって1区画 (*kotak, petak*) ごとに、前から後ろへ後ずさりしながら植えていった^(註11)。ジャワの伝統稲作において苗の植えつけが、規則正しく列をなす、いわゆる「正条植え」であったのか否かは分からないが、ピーによれば、まず畦に沿って水田の端に1列植えられ、次にそれをガイドラインとして横に平行して植えられていった^(註12)。こうして女性による田植が行なわれている間、水田所有者は田植を「監督」していた。

「監督」といっても男は田植えについての知識はなく、苗が傷むことにも無頓着で、ただ苗が盗まれないよう見張っているだけであったという^(註13)。苗と苗の間隔は、その水田の肥沃度、地理的条件、稲の種類などによって異なったので一概には言えない。たとえば高地の気温が低い場所があり、かつあまり肥沃でない水田の場合、温かで肥沃な水田の場合より間隔は狭い。なぜなら後者の場合、前者の場合より苗の「分けつ」が活発なので、稲が密生状態にならないために苗と苗の間隔を広くする必要があるからである^(註14)。かかる差はありながらも、平均的な苗と苗の間隔は、19世紀中葉の資料によれば1²/₃から4分の3²/₃ほどであり^(註15)、1870年代の資料によれば長期種および短期種の場合、平均2分の1²/₃であった^(註16)。これらの数値は、苗と苗の間隔が19世紀の中葉から末にかけて明らかに狭くなったことを示している。これは興味深い問題であるが、現段階ではこれを一般的傾向と即断することはできない。

田植の作業は朝6時半ころから、間に30分ほどの休憩をはさみ、せいぜい午前10時ころには終了

した。というのも、この時刻を過ぎると田の水温が上がりすぎ、植えたばかりの苗を弱めてしまうからである。休憩の際に水田所有者の妻は手伝ってくれた女性に朝食や飲み物をふるまい、1日の作業が終わった時には家に持ち帰る食事を出した。もし田植が1日で終わらない場合には翌日朝から田植をすることになる。移植の作業を手伝った人々に若干の報酬を払うこともあった。しかし田植は同じ村の農民によって、後に助力を頼む(nyambat)ことを前提に、労働交換を原則として行なわれたので、労働の対価としての「賃金」は払わなかったようである^(注17)。単位面積当りに必要な労働力は、苗と苗との間隔、稲の種類、その地方の慣習によって異なった。ヘルプケ(Sollewijn Gelpke)によれば、平均して70人の女性が3時間で1^レの水田に田植を完了したという^(注18)。しかしたとえ田植の面積が1^レであったにしても、70人が一斉に田植えに参加したとは考えにくいので、この場合の70人という数は恐らく、一定面積に対して必要とされる延べ人数の目安であろう。したがって、もしこの割合から判断して一度にこ

れだけの人数がそろわなければ何日かかかって田植をすることになる。

(続く)

(注1) Gelpke, 前掲論文, 143ページ。

(注2) 同上/Hoek, 前掲論文, 341ページ。

(注3) Gelpke, 前掲論文, 144~145ページ/Veth, 前掲書, 第4巻, 498ページ。

(注4) Bie, *De Landbouw*....., 42ページ。

(注5) 同上書 37ページ。

(注6) Broek, 前掲論文, 14ページ。

(注7) Henny, 前掲論文, 46ページ/Gelpke, 前掲論文, 145ページ/Bie, *De Landbouw*....., 42~43ページ/同, *De Rijstkultuur*....., 27ページ。

(注8) Bie, *De Landbouw*....., 41~42ページ。

(注9) Broek, 前掲論文, 14ページ。

(注10) Gelpke, 前掲論文, 151ページ。

(注11) Broek, 前掲論文, 14, 17ページ。

(注12) Bie, *De Landbouw*....., 42ページ。

(注13) Broek, 前掲論文, 13~14ページ。

(注14) Bie, *De Landbouw*....., 43ページ。

(注15) Parvé, 前掲論文, 404~405ページ。

(注16) Hoek, 前掲論文, 343ページ。

(注17) Parvé, 前掲論文, 404~405ページ/Gelpke, 前掲論文, 152ページ。

(注18) Gelpke, 前掲論文, 152ページ。

(八千代国際大学教授)